広田っ子

～本物の笑顔が輝く広田小～

佐世保市立広田小学校　学校だより
第２号　令和４年５月１７日（火）
文責　井上　文典

「**本物の笑顔**」に簡単アクセス
広田小HP　QRコード

コロナ禍でも運動会は　練習も本番も工夫して　精一杯頑張ります！

緑がまぶしい時期になりました。子どもたちは連休の後も、しっかりと気持ちを切り替えて登校しています。

さて、本校は５月２９日（日）の午前に１年生から５年生の運動会を予定しています。競技の内容や参加していただける人数等は制限されますが、子どもたちの成長した姿を東部グラウンドで見ていただきたいと思っています。コロナの感染状況が大変気になっていますが、練習を含めて感染症対策を十分に行いながら準備を進めていきます。なお、新型コロナ感染症の拡大の状況がみられる場合には延期の可能性があることをご理解いただきたいと思います。

さて、コロナ禍ではありますが、運動会は、練習を含めて子どもたちの２つの姿を見ています。その２つとは「精一杯」の姿と「貢献」する姿です。

「精一杯」のためには、子どもたち自身が願いをもつことが大切！

運動会本番だけでなく、練習の時から、この「精一杯」という言葉と実践を大切にして取り組んでいます。この「精一杯」が出せるようになるためには、子どもたち自身が「願い」をもつ必要があります。「先生から言われたから」「お家の人が言ったから」などの動機では、「精一杯」は出せません。

例えば応援では、「コロナ禍でも工夫して応援をしたい」という願いを一人一人がもたなければ「精一杯」の姿にはなりません。また、ダンス等の表現でも、「見られる」ではなく「見せたい！」という願いをもった時に精一杯の表現につながっていきます。子どもたちが、学校生活の中での「○○したい」「○○ができるようになりたい」という純粋な願いは、学びの大切な要素だと考えています。

貢献できるということは、学びを生かすことができるということ！

運動会の応援では、子どもたちが協力し合う姿を見ることができます。自分のことより全体のこと、仲間のことを優先して行動している姿、他者に貢献している姿もたくさん見ることができます。特に５年生は応援歌や振付のアイデアを考えたり、練習したり、反省会をしたりする等、リーダーとして頑張っています。運動会の準備や練習では縁の下の力もちとなって貢献している子どもの姿も、見ることができます。学びの成果としての「貢献」の姿もとても素晴らしいです。

頑張っている子の頑張らない時間「ほっとタイム」

運動会の練習で疲れた心と体には・・・

栄養と睡眠　そして「傾聴（けいちょう）」が効きます！

お子さんの話を聞いてあげてください



頑張っているときは、実は悩みも出てきます。

お子さんが「あのね・・・」と話しはじめたとき、ほんの少し耳を傾け、聞いてあげるだけで、笑顔で登校するためのエネルギーになります。

ぜひ「そうね・・・」「そんなことがあったのね」「また、話してね」…と聞いてあげてください。

子どもたちは、「自分の課題は自分で解決したい」と思っています。しかし、ほんのちょっと支えてほしいときがあります。その支えが「傾聴」です。

運動会前…ご家庭でも**頑張っている子の頑張らない時間「ほっとタイム」**をつくってみてください。

応援リーダーからリモートでメッセージ！一致団結！



赤ブロック



青ブロック



黄ブロック



緑ブロック



桃ブロック

応援団が、全校児童に向けてリモートで「力を合わせてがんばるぞ」というメッセージを送りました。それぞれのブロックのリーダーから、熱い思いがしっかりと伝わりました。

コロナ禍の運動会は、様々な制限があります。しかし、子どもたちはその中でも、工夫しながら活動しています。特に応援団は「何ができるか」「どうやったらできるか」を真剣に考えながらアイデアを出し合い、練習をしています。あきらめず工夫する応援団の姿の中に、子どもたちの成長の姿があります。

ひとこと

「本物の笑顔のために」その１

「どうせ〇〇」という子どもの声には…

校長として、一つの言葉には敏感に反応します。

その言葉は**「どうせ〇〇」**という言葉です。

子どもたちが**「どうせ〇〇」**とつぶやいたときには、そばに行って「こうしてみたらどうだろう」と工夫できるポイントをいっしょに探ります。（安易に教えません）

どうせ…は思考を止めるキーワード、あきらめのスイッチです。あきらめることはいつでもできます。自分の目標に対し、あきらめるという選択肢は最後の最後までとっておく習慣を身に着けることがとても大切だと思っています。

学習はもちろんですが、運動会の練習やそのほかスポーツのことなども話を聞いていきます。

下町ロケットのモデルになった植松電機の植松努さんは「子どもがあきらめるのは『失敗したらどうするの』とか『あなたには無理よ』等とあきらめることを教えられるから」「やったことが無い人はできない理由しか教えてくれません」と著書で述べています。このことは私自身、一人の親としても強く同感し、反省するところがあります。



子どもたちの身近にいる大人として、可能性を伸ばすために、この「どうせ〇〇」という心のつぶやきとしっかり対峙していきます。